

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 4 号 (6 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >	作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >
イ ネ	葉いもち	やや少 (やや少)	チ ヤ	カンザワハダニ	山城: やや多 (多)
	ニカメイチュウ (第 1 世代)	並 (並)		丹波: 並 (やや多)	
	ヒメトビウンカ	やや多 (やや多)		並 (並)	
	縞葉枯病	並 (並)		並 (山城: やや少)	
ツマグロヨコバイ	やや少 (並)			並 (丹波: 並)	
イネミスズウムシ	やや多 (並)				
ナ シ	黒斑病	並 (やや少)	キュウリ、	疫病	並 (並)
	黒星病	やや多 (並)	トマト等	褐色腐敗病	
ブドウ	べと病	並 (並)	キュウリ	べと病	並 (やや少)
	フタテンヒメヨコバイ	やや少 (やや少)	キュウリ、	斑点細菌病	並 (並)
カ キ	落葉病	並	トウガラシ	うどんこ病	少 (並)
	うどんこ病	やや多 (多)	キュウリ、		
カンキツ、	ハダニ類	やや多 (多)	トマト等	さび病	並 (やや少)
ナシ、			ネギ	ネギハモグリハエ	やや多 (並)
ブドウ				ネギアサミウマ	多 (やや多)
果樹全般	カメムシ類	やや少 (やや少)	ナス、トマト	アブラムシ類と	並 ~ やや多
	もち病	並 (並)	キュウリ等	モザイク病	(やや多)
	チャノコカクモンハマキ	並 (山城: 少)	果菜類	ハダニ類	並 (やや多)
	チャノホソカ	並 (丹波: 並)		アサミウマ類	並 (並)
	チャノキイロアサミウマ	山城: やや多 (並)	アブラナ科	コナガ	やや少
		丹波: 並 (やや多)	野菜		
		並 (山城: やや多)			
		(丹波: やや少)			

※ 平年とは過去 10 年の平均である。

目次

予報の概要 1
予報 I 気象予報 2
II 用語の定義 2
III 予報本文の見方 3
IV 予報本文 4
6 月に注意すべきその他の病虫害 1 2

予報

I 近畿地方1か月予報（5月16日から6月15日までの天候見通し）

平成21年5月15日
大阪管区気象台発表

＜予想される向こう1か月の天候＞

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は、数日の周期でかわるでしょう。

向こう1か月の気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目は平年並または高い確率ともに40%、2週目は高い確率60%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	20	30	50
降水量	30	30	40
日照時間	40	30	30

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は高く、降水量、日照時間はともに平年並と予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5日	6～10日	11～15日	16～20日	21～25日	26～最終日

2 発生量――病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値――原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量（発生量、発生面積等）

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

(例)

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比少ない（前年比少ない）
丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
発生時期：第3世代幼虫ふ化期8月第3～4半旬（平年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比として示しています。
- ・平年比の考え方は、「I 用語の定義」の「5 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は前年の実際の発生量（時期）との比較を示しています。
- ・必要に応じて地域別に示しています。

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、第2世代の発生量は山城で平年比少なく（-）、丹波でやや多い（+）。
- (2) 第1世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期は平年並であった。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップへの誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の根拠となった事項を示しています。
- ・文中の（-）、（+）は、発生量の予想に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合は発生量が少なくなる要因、（+）は発生量は多くなる要因を示します。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、4回世代を繰り返し、第2世代成虫が7月下旬～8月上中旬に発生し産卵する。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除上の留意事項、要防除水準等を示しています。

IV 予報本文

イネ

1 葉いもち
<p>予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない） 発生時期：初発生時期 6月第5半旬（平年並）</p> <p>予報の根拠 （1）5月中旬現在、補植用苗での発生を認めていない。 （2）前年の穂いもちの発生量は平年比やや少なかった（－）。 （3）向こう1か月の気温は高く、降水量、日照時間はともに平年並と予想されている。 （4）長期持続型箱施用剤の普及率が高まっている（－）。</p> <p>発生生態及び防除上注意すべき事項 （1）空気伝染し、発病適温は14～30℃（最適25℃）である。降雨あるいは霧などによって長時間イネが濡れ続ける場合は感染に好適である。湿度が高いと病斑の進展、胞子の形成量は高まる。 （2）補植用苗をそのまま放置すると、葉いもちの発生源となる。補植後、速やかに残り苗を処分する。 （3）ほ場を見回り、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に、畑作跡では注意する。 （4）長期持続型箱施用剤を使用していない多肥田や山間、山沿い等の発生しやすいほ場では、曇雨天が続く場合、6月中旬頃に予防のため粒剤などを施用する。 （5）平成16、17年度の調査でMBI-D剤耐性いもち病菌が一部地域で確認されたので、薬剤の選定にあたっては注意する。 MBI-D剤：カルプロパミド（商品名：ウィンなど）、ジクロシメット（商品名：デラウスなど）、フェノキサニル（商品名：アチーブなど）</p>
2 ニカメイチュウ（第1世代）
<p>予報内容 発生量：平年並（前年並） 発蛾最盛期：6月第4半旬（平年並）</p> <p>予報の根拠 （1）前年秋期の発生は平年並で、越冬量は平年並と見込まれる。</p> <p>発生生態及び防除上注意すべき事項 （1）稲ワラや刈り株等で幼虫越冬し、年2回発生する。 （2）山城地域平坦部の野菜・チャ・イチジク栽培地域等で発生しやすい。 （3）6月末に葉鞘変色茎の割合が全体の5%以上の場合、そのまま放置すると経済的被害が発生する。</p>
3 ヒメトビウンカと縞葉枯病
<p>予報内容 発生量：ヒメトビウンカ 平年比やや多い（前年比やや多い） 縞葉枯病 平年並（前年並） 発生時期：ヒメトビウンカ第1世代成虫発生最盛期 6月第3半旬（平年並）</p> <p>予報の根拠</p>

- (1) 未耕起田等でのヒメトビウンカの越冬量は平年比やや多かった (+)。
- (2) 昨年は、縞葉枯病の発生は認めていない。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ヒメトビウンカはイネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況等が翌年の発生に影響する。
- (2) 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介され経卵伝染するが、近年、縞葉枯病の発生は減少している。

4 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

- (1) 未耕起田等でのツマグロヨコバイの越冬量は平年比やや少なかった (-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 4 齢幼虫でイネ科雑草において越冬する。
- (2) 直接吸汁加害する他、萎縮病等を媒介する。

5 イネミズゾウムシ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 前年新成虫の予察灯への誘殺数は平年並～やや多かった (+)。
- (2) 5 月第 2 半旬現在、越冬世代成虫の予察灯への誘殺数は平年比やや少ない (-)～平年並。
- (3) 5 月中旬現在、本田での発生量は平年比多い (+)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の新成虫が越冬し、田植え後、水田に侵入して葉を食害する。5 月中下旬から卵を産む。
- (2) ふ化した幼虫が土中で根を食害する。
- (3) イネが根腐れするような水田では幼虫の被害が出やすいので、深水を避け、根を健全に保つ。
- (4) 浅水管理は成虫の産卵行動を阻害し、産卵場所を制限する効果がある。
- (5) 粒剤の育苗箱施用の効果が高い。なお、イネドロオイムシの常発地では、この方法で防除ができる。
- (6) 育苗箱施用剤を使用しなかった場合や田植え後発生が多く、成虫が株当たり 0.3 頭を越える場合は、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5 月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 越冬罹病枝率は、平年並。
- (3) 向こう 1 か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 6月から7月の梅雨期が感染最盛期であり、雨が降り続くと被害が多くなる。
- (2) 袋掛けは早めに行い、袋掛けの直前に必ず薬剤を散布する。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年比多い（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は高く（-）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発病適温は15～25℃である。
- (2) 雨が降り続き、低温が続くと発生が多くなる。
- (3) 赤ナシは発病しやすいので、予防的に防除する。

3 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発病適温は22～25℃である。
- (2) 5～6月に多雨であると多発生となる。
- (3) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

4 ブドウ フタテンヒメヨコバイ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（-）。
- (2) 前年秋期の発生量は平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発生の適温は20～28℃で、露地より施設で多発する傾向がある。
- (2) 宅地付近や石垣などで越冬し、年3回の発生を繰り返すので、露地においても注意が必要である。

5 カキ 落葉病

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- (1) 前年秋期の発生量は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 潜伏期間が長く、6月中旬から下旬に感染すると秋に多発する。

6 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年比多い(+)。
- (2) 前年秋期の発生量は平年比やや少ない(-)。
- (3) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5～6月が初発時期である。
- (2) 6～7月に多雨であると、若葉に被害が現れやすい。

7 ハダニ類 (カンキツ、ナシ、ブドウ)

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比多い)

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年比やや多い(+)。
- (2) 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) カメムシ類等を防除するために、合成ピレスロイド系薬剤を使用した園では、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。
- (2) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性が発達しやすいので注意する。

8 カメムシ類 (果樹全般)

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年比やや少ない)

予報の根拠

- (1) 越冬量調査では発生を認めている。
- (2) 5月第2半旬現在、予察灯への誘殺数は京丹後で平年比やや少ない(-)。
- (3) 5月第2半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 園外から飛来し局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。

チャ

1 もち病

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない(平年並)。
- (2) 前年秋期の発生量は平年並。
- (3) 向こう1か月の気温は高く(-)、降水量、日照時間はともに平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、二番茶の新芽に感染する。
- (2) 気温20℃前後で湿度が高く、日照不足の条件下で多発する。
- (3) 一番茶摘採後に病葉が認められる園や常発地では注意する。

2 チャノココカクモンハマキ

予報内容 発生量：平年並(山城：前年比少ない 丹波：前年並)

第1世代幼虫ふ化時期

山城：5月第4半旬～5月第6半旬（平年比やや早い）

丹波：5月第5半旬～6月第1半旬（平年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治で平年比やや多く（+）、綾部で平年比やや少ない（-）。
- (3) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治で平年比やや早い。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、第1世代幼虫ふ化期は5月末～6月始めで、年4回世代を繰り返す。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

3 チャノホソガ

予報内容 発生量 山城：平年比やや多い（前年並）
丹波：平年並（前年比やや多い）
第2世代幼虫ふ化時期：6月第2～3半旬（平年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、第1世代の発生量は山城で平年比やや多く（+）、丹波で平年並。
- (2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治で平年並、綾部で平年比やや少ない（-）。
- (3) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治で平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、年5回世代を繰り返し、5月下旬～6月中旬に第1世代成虫が発生し産卵する。
- (2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。
- (3) 第2世代幼虫の発生時期と二番茶の生育が重なるため、被害が大きくなるので注意する。

4 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：平年並（山城：前年比やや多い 丹波：前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。
- (3) 一番茶期に密度が高かった地域では、二番茶の萌芽期から開葉期に十分注意する。

5 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比多い）
丹波 平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は山城で平年比やや多く(+)、丹波で平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5～6月に多発し、10～30℃の範囲では高温の時ほど繁殖力は高いが、降雨により増殖が抑制される。
- (2) 通常、葉の裏側に生息するので、薬剤は葉の裏側にかかるように丁寧に散布する。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、二番茶期以降、発生が多くなる。
- (2) 二番茶の萌芽期から開葉期に加害されると、新芽の生育が著しく悪くなるので注意する。

7 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：平年並（山城：前年比やや少ない 丹波：前年並）
幼虫ふ化時期：5月第5半旬～6月第1半旬（平年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回（一部山間部では2回）発生する。1回目の幼虫ふ化期は時期が比較的揃っているため、この世代のふ化幼虫を対象とする防除は一年中で最も効果的である。なお、標高の高いところではふ化が10日程度遅れる。
- (2) 薬剤散布は株内部の枝に十分かかるように行う。

野菜

1 疫病・褐色腐敗病

（カボチャ、スイカ、キュウリ、トマト、ナス、トウガラシなど）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 水によりまん延することが多いので、ほ場の排水に努める。特に降雨時の地表水を速やかに排水する。
- (2) マルチを行って、はね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

2 キュウリ ベと病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 曇雨天が続くと初発生及びまん延期が早くなる。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えないように肥培管理に注意する。

3 斑点細菌病（キュウリ、トウガラシ）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、巡回調査では発生を認めていない（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から入って発病する
場合が多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除が重要である。

4 うどんこ病（キュウリ、カボチャ、トマト、トウガラシなど）

予報内容 発生量：平年比少ない（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生を認めていない（平年比少ない（－））。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
- (2) トウガラシ類では、ハダニ類の被害と類似しており判断がつきにくいので
十分注意する。

5 ネギ さび病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春から初夏に発生が多く、九条ネギは発病しやすい。

6 アブラムシ類とモザイク病

予報内容 発生量：平年並～やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、アブラムシ類の発生量は平年並。
- (2) 5月第3半旬現在、黄色水盤への誘殺数は平年比やや多い（＋）。
- (3) 向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散・飛

- 来し、発生が拡大する。
- (3) 高温、乾燥が続くと発生が多くなる。
- (4) キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に特に注意する。

7 ハダニ類（果菜類）

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 高温、乾燥が続くと、発生が増加する。
- (2) ハウス栽培では、天候の如何に関わらず増殖しやすい。

8 アザミウマ類（果菜類）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量はキュウリで平年比やや多く（+）、ナスで平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介する種もいる。

9 コナガ（アブラナ科野菜）

予報内容 発生量：平年比やや少ない

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、キャベツでの発生量は平年比やや少ない（-）。
- (2) フェロモントラップへの誘殺数は、平年並。
- (3) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。
- (2) 年間の発生回数が多く、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。

10 ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 5月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 5～6月が少雨の年に多発しやすい。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は、20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 発生の目立つほ場も認められるのでよく見回り注意する。

11 ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）５月中旬現在、発生量は平年比多い（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）年間、１０世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。

（２）葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。

6月に注意すべきその他の病害虫等

発生量を予報していない病害虫について発生生態及び防除上注意すべき事項を掲載しています。

果樹

1 カキノヘタムシガ・カキクダアザミウマ

果実の被害を防ぐため、開花終了後から6月下旬にかけて防除する。

チャ

1 ミカントゲコナジラミ

ミカントゲコナジラミは、平成16年8月に国内で初めて、京都府においてチャへの寄生が確認され、分布が拡大している。平成21年5月中旬の調査では、府内各地で発生を確認し、多発園も認めた。

（１）成虫の発生

年に4回発生する。

（２）対策

農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

（３）登録のある薬剤

- ・ハチハチ乳剤（1,000倍、摘採14日前まで／1回）
- ・アプロード水和剤（1,000倍、摘採14日前まで／2回以内）
- ・アプロードエースフロアブル（1,000倍、摘採14日前まで／1回）
- ・ダニゲッターフロアブル（2,000倍、摘採7日前まで／1回）

2 ツマグロアオカスミカメ

一番茶期に被害を受けた地域では、二番茶の萌芽期から開葉期に十分注意する。

野菜

1 トマト黄化葉巻病とタバココナジラミ類

トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気であり、タバココナジラミ類によって媒介される。平成17年12月に府南部の抑制栽培トマトで発生が確認されて以降、最近では、平成20年11月に発生を確認しており、今後とも注意が必要である。

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、発生初期の発病株の抜き取りとタバココナジラミ類の防除を速やかに行い、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。

【施設栽培】

- (1) 黄色粘着板などを利用し、コナジラミの発生状況に注意する。
- (2) 先端部の葉が内側に巻いているもの、葉縁が黄化しているもの、株が萎縮しているものを認めた場合、関係機関と相談の上、発病が疑わしい株は速やかに土壤に埋める等、適正に処分する。

2 タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。本州では在来系統（バイオタイプ J p L）、バイオタイプ B（従来のシルバーリーフコナジラミ）、バイオタイプ Q が確認されている。バイオタイプ Q は平成17年に国内で確認された侵入害虫で、発生確認後各地で発見されるようになった。

府内の分布調査では、タバココナジラミ類は京都府全域に発生し、特に夏以降発生が増加することがわかった。

平成17年には山城地域でバイオタイプ Q が府内で初めて確認され、平成20年10月には、府内全域で発生を認めた。

バイオタイプ Q は薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、以下の3点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

- ・施設内にコナジラミを「入れない」。
 - (1) 開口部の防虫ネット被覆。
 - (2) 黄色粘着ロールの展張。
 - (3) 近紫外線カットフィルムの使用。
- ・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
 - (1) 発生初期の防除の徹底。
 - (2) 薬剤のローテーション防除の実施。
 - (3) 天敵や微生物農薬の有効利用。
- ・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。
 - (1) 開口部の防虫ネット被覆。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧

・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

農作物病虫害情報サービス

- ・テレホンサービス
0771-23-6442
- ・ホームページアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－